

地域に生きる板倉

岐阜 二世帯住宅「千里邸」

愛知 「おおぞら学童保育クラブ」

福島 復興住宅「鈴木邸」

特集

新たな  
動きを見せる

# 北部九州の 板倉

1 方丈板倉齋

2 住幸房

2021  
07

ITAKURA  
HOUSE



連載

板倉自由自在 「古河の板倉の民家」

小屋百景 「方丈板倉齋の離れ」「泉ヶ岳ふんわり板倉」

世界板倉遺産 「岩瀬牧場のとうもろこし倉庫と板倉」

PART  
1

# 水害の地に 木挽き棟梁が建てた 方丈板倉齋

2017年7月に発生した九州北部豪雨で甚大な被害を受けた福岡県朝倉市。この地で製材所を営む杉岡世邦さんは2020年、方丈の板倉齋を建設した。災害復興の願いが込められた板倉は、感染症という新たな危機に見舞われた日本と、スキの未来を見据えた希望のプロジェクトでもある。その背景と関わった方々の想いを伝えたい。



杉岡製材所の一角に建つ方丈板倉齋（さい）。災害の拠点、製材技術の展示、そして復興への願いと鎮魂という想いが込められている。

## 板倉 北部九州の

新たな動きを見せる

特集

取材文／平山友子 撮影（特記以外）／齋藤さだむ

いたくら ITAKURA HOUSE

2021年 No.7

特集 新たな動きを見せる

# 北部九州の板倉

- 01 PART 1 水害の地に木挽き棟梁が建てた方丈板倉齋
- 18 PART 2 若き大工集団が打ち出す、シンプルで合理的な自分たちが欲しい板倉

板倉自由自在 Renovation of ITAKURA

- 25 眠っていた宝を未来へつなぐ。明治の梁が支える母屋と離れ

「古河の板倉の民家」(茨城県古河市)

板倉小屋百景

- 34 心に余裕をもたらす小屋の在り方

「方丈板倉齋の離れ」(茨城県つくば市)

- 36 子ども視線を盛り込んだ、遊び心満載の小屋

「泉ヶ丘ふんわり板倉」(宮城県仙台市)

- 38 板倉を彩る暮らしのコラム 屋根の楽園、楽園の屋根

- 40 板倉に住む 第4回 住まいもお店も安心して快適、動物達ものびのび。ずっと好きでいられる家。

地域に生きる板倉

- 42 冬寒く、夏は高温多湿。厳しい気候にも打って付けの板倉の家

「千里邸」(岐阜県岐阜市)

- 44 板倉の学童づくり、愛知から全国へ進展中

「あおぞら学童保育クラブ」(愛知県名古屋)

- 46 仮設住宅で住み心地を体感。板倉で建てた復興住宅

「鈴木邸」(福島県双葉郡)

世界板倉遺産 第6回

- 49 岩瀬牧場のとうもろこし倉庫と板倉

- 55 板倉の家は私達がつくれます

COVER STORY

生きるための  
板倉



「杉岡齋」

福岡県朝倉市で製材業を営む木挽き棟梁、杉岡世邦さんが建てた方丈板倉齋。災害時に生きのびるための避難所として、自身の仕事を伝える場として、そして鎮魂、心の再生の場として築いた。



「鬼杉」

福岡と大分の県境にまたがる英彦山の、修験道場として築いた英彦山神社に立つ鬼杉。樹齢1200年と伝わる巨木は、信仰のために修験者が植えたのかもしれない。神々しい圧倒的な存在感を放つ。

写真2点／齋藤さだむ



内部の柱は板目使い、壁板は源平材、床は白太の浮づくり。  
ありふれた材料を活かす事例として見せている。



床には、拈華微笑の座像を安置。  
高良杉の床板を宙に浮かせて前に座った人が座像の目線と合うように取り付けた。

被災木の像が見守る室内は、  
人と人との結びつきを確かめる茶室のような空間。



内部には床柱のように北山杉を棟持柱として立てた。  
わずか10cmの径に梁を三方差しにしている。  
ロフトへは、段板を互い違いに配したハンゴで上がる。  
像を置いた床との仕切りともなる。



上／遠くの山が  
もっとも美しく見える位置を検討し、  
露台の高さを1m50cmに決めた。  
左／外壁は1尺幅の赤身の板。  
板と板の間に雇い実を入れて  
留めている。隅や窓回りの施工は  
特別な工夫が必要だった。

方丈記の思想を  
受け継ぐ方丈板倉齋。  
3坪の小建築に込められた、  
危機の時代の希望

東面には朝日の直射をさえぎるためにしとみ戸を設けた。工業製品である窓ガラスの存在感が消えた。建具製作は佐賀県鳥栖市にある手島木工所の手島弘視さん。



どこにでもあるスギを  
活かすことで、  
山も人も息を吹き返す。  
製材所の存在意義は  
ここにあり

所在地／福岡県朝倉市  
設計／里山建築研究所  
製材／杉岡製材所  
施工／大工・池上算規  
屋根／上村組  
露台設計・施工／建築工房悠山想

長年自然乾燥させて黒ずんだ丸太は、割角に挽き、製品に仕上げることで輝きを放つ。製材所の一角にあることで、完成した方丈板倉齋の工程が手に取るようにわかる。



ここまで張り詰めたような緊張感が漂う建物である必要はないだろう。杉岡齋は、製材所としての矜持の表れでもある。南面出入口左の外壁板には1尺幅のスギの赤身を柂目使いにしている。直径1mの大径木から板に挽いた。「今の林業は若い木をどんどん切って回した方がよいといわれています。大きく育った木は使い道がなく、安値でしか売れないからです。でも、治山治水を考えても、木は高樹齢まで育てて山に置いておく方がいいんです」。柱や梁に使ったのは芯去りの割角。割角にする木も当然大径木だ。こうした木が、今は合板や集成材の材料にさえなっている。「日本の山は宝の山なのに、宝だと思われていない。見せて使わないともつたいない、というのが僕からの訴えかけです」。

内部は壁板には源平材、床板には無地の白太を使った。3・5寸角の柱は板目使いにしている。杉岡さんいわく、「どこにでもあるスギ。うちの在庫では『中の中』なのだそう。源平材は製材する段階で多く出るんです。源平材をきれいにさせるのは難しいけれど、それをしないと木が活きません」。さまざまなスギが使われた杉岡齋で、木を活かす任務を負ったのは、大工の池上一則さん。杉岡さんの意図を汲み、無理難題にに応じて細部まで神経が行き届いた施工をした。木を見せることを前提とした製材の技術

幹線道路から1本入った閑静な通りに、光り輝くように現れる素木の方丈板倉齋。清水寺の舞台を思わせる露台には神社のような階（きざし）が取り付く。行き過ぎる人が興味深そうに眺めていく。建主は杉岡製材所3代目の杉岡世邦さん。品種の特性を熟知し、目利きの技を発揮して買い付けたスギの高齢樹丸太を、大量にストックしながら自然乾燥させている。注文が来たら一棟すべての材を木取りする。スギをこよなく愛する木挽き棟梁だ。

九州北部豪雨は、そんな杉岡さんを打ちのめした。大量の土砂とともに、山に植林されたスギが押し流され、人家を倒壊させた。祖父が植えた山の木も流された。「もうスギはよか」という声があちこちから聞こえた。まるでスギが加害者になったようだった。それでも再び立ち上がったのは、やはりスギがあったから。九州大学大学院芸術工学研究院教授の知足美加子さんをはじめとする九州大学ソーシアルアートラボと復興ガーデン（10頁参照）を協働し、安藤邦廣さんに製材所の一角に建てる倉庫の助言を求めた。その延長線上に方丈板倉齋がある。「自分の中では何となく倉庫のイメージが湧かずにいました。それから1年ほどして安藤先生が方丈板倉齋の構想を発表され、これだ、これを建てたいと思いま

した」

と大工の技術が一体となり、一般に流通する材料を使った室内が、茶室のように密度の高い空間になった。

屋根は杉皮葺きだ。杉岡さんの祖父が大事に手入れした山が被災し、砂防ダムの建設のために伐られることになった。その山にあったスギの皮を使った。杉岡さんにとっては思い出深い山。茅葺き職人の上村淳さんはその思いに伝え、一枚一枚慈しむように葺いた。

内部には空間を分けるように北山杉の丸柱が立つ。「人工林の原点は北山にある」と思っています。そういう意味でここに直径10cmの北山杉を持つてきました。これは床柱のような存在なのだそう。奥には「拈華微笑」と名付けられた少女の木像がある。作者は知足美加子さん。「被災した木にもう一度命を与えたい」と願った杉岡さんとともに被災地で回収した流木のクスノキを彫った。杉岡齋はこの像を安置する鎮魂の場所でもある。この丸柱と木像によって、杉岡齋の印象は全く変わったと杉岡さんは述べた。それを受けて安藤さんはいう。「方丈板倉齋はひとりでもなる場所でもあるけれど、誰かと裸の心で向き合う場所でもあります。像が入った途端に人々が車座になり、像を介して心を割って話すことができるようになりました」。方丈板倉齋は、心の拠り所にもなり得ることを示している。

そのひとつが災害時の二次拠点としての役割を示すこと。豪雨の際に杉岡製材所も床下浸水の被害を受けた。方丈板倉齋を高さ1m50cmの露台の上に乗せたのは、建設地がハザードマップで3〜5m浸水と色分けされたからだ。また、2016年の熊本地震の際には、庭先に建てる板倉の避難小屋を被災地につくる支援活動をした。そうした経験が踏まえていう。「災害時に命を守れたら、その次に必要なのは生活の再建です。再建する気力や活力を保ち続けるためには、落ち着いて休める場所が欠かせません」。感染症が拡大する今、密集した都市を避けて地方に拠点を持つ際の住居にもなり得る。それにしても、単なる避難小屋ならば、

## 木割りの技術を発揮する 杉岡製材所

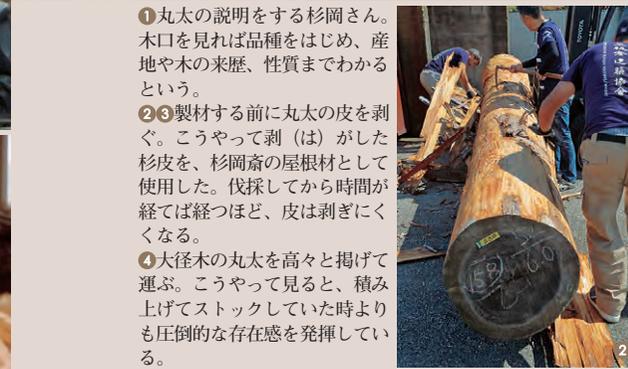
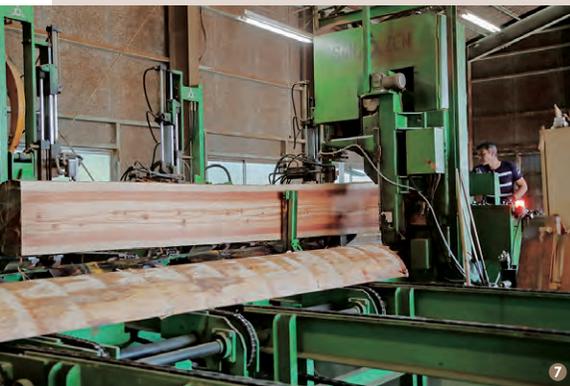
「杉岡齋」は木の使い方を見せるショールーム的な役割も果たしている。「今の木造建築は製材の重要性がすっかり抜け落ちていきます。この技術をやみがえらせないと、日本の山は宝の山にならないのではないのでしょうか。僕が提案するひとつの回答がこの杉岡齋なんです」。

構造材は渡り<sup>あこ</sup>に組み、柱以外はすべて木口を見せている。天井板も外まで伸ばして木口を見せた。杉岡齋で使った構造材は、すべて芯去りの割角。芯去り材は大径木からしか取れないが、節の少ない美しい表情が出るのだという。木の割り方には2つ割り、4つ割り、4丁取り、柂取りといった種類があって、それぞれの特徴を見せるためでもあると杉岡さんは話す。「木口を見せることでどんな割り方をしているかわかるし、元の丸太の形もイメージできます」。木が割れないようにするにはどのように木取りをすればいいか、柂目と板目の使い分けなど、使う場所に応じた適材適所の木取りを提案するための製材見本にしている。

また、木口には品種によるスギの性質も表れるのだという。一口にスギといっても、品種は多岐にわたり、性質も異なる。それを大きく分けると<sup>みしよう</sup>実生系と挿し木系になる。実生系の方がおとなしい材質のため、杉岡さんは造作や建具、板材など、曲がったり反ったりしてほしくない場所に使っている。一方の挿し木系は力強い品種を選び、柱や梁に使うのだという。たとえば露台に上がる階段には、あえて品種の違うスギを使っている。挿し木系は<sup>ひこさん</sup>英彦山周辺の帆柱地区由来のスギ。とても固く、製材する時に暴れる。だが、帆柱になるように靱性も高く強く、割れが入りにくいのだという。一方、実生系のスギの木口は真ん中に芯があって冬目が細い。柔らかくてすっとした見た目だけど、割れやすいのだという。また、同じ実生系でも品種や産地によって表情が微妙に異なる。こうして比較できることで、適材適所の使い方がわかる。木挽き棟梁の目利きの技が発揮されている。

①丸太の説明をする杉岡さん。木口を見れば品種をはじめ、産地や木の来歴、性質までわかるという。  
②③製材する前に丸太の皮を剥ぐ。こうやって剥(は)がした杉皮を、杉岡齋の屋根材として使用した。伐採してから時間が経てば経つほど、皮は剥ぎにくくなる。  
④大径木の丸太を高々と掲げて運ぶ。こうやって見ると、積み上げてストックしていた時よりも圧倒的な存在感を発揮している。

④4つ割りという木取り。必ず腹と背を割るように鋸を入れる。割った材は柱に使用する。  
⑩2つ割りは桁や梁を取るための木取り。芯側の面は応力が解放され、曲がりが生じている。自然乾燥させた後に修正挽きする。  
⑪大径木から4寸角と5寸角を合わせて7つの材を挽いた。どの材も赤身を使うことができる。芯の部分は節が多く、化粧にはあまり使わないとのこと。



杉岡製材所の従業員たち。そろいのTシャツは、安藤邦廣さんがデザインした日本板倉建築協会のもの。

**CONTACT INFORMATION**  
有限会社杉岡製材所  
福岡県朝倉市杷木久喜宮 888  
tel.0946-23-8088  
<http://www.sugikatoshikuni.com>

